

小学校高学年用

分かっているのに

分かっているのに

「あっ、これだ。すごい、本当にあった。ノゾミちゃんのブログだ。」

マキの声を聞き、ミユキは急いでパソコンの画面をのぞきこんだ。今日は、マキの家でグループ研究の調べものをしたあと、いっしょに遊ぶことになっていたのだ。

「えっ、何。ブログって。」

「えっとね。インターネットの中の日記みたいな感じかな。いろんな人に見てもらうの。ほら、見た人は、コメントも書きこめるんだよ。」

画面をもう一度見てみると、その日の夕飯の写真や、見たテレビの感想などが書いてあって、たしかに日記のようだった。

「ね、わたしたちもコメントしてあげようよ。ええっと、『はじめて見たよ。すごいね。マキ☆ミユキ』と、これでいいや。」

マキがポンとキーをおすと、ブログの画面に文字が表示された。

「すごい。書きこめた。」

「さ、調べものの続きをしようよ。ノゾミちゃんの分もがんばらないと。」

「うん。明日はノゾミちゃん、来られるといいね。」

そう言いながら、ミユキも続きに取りかかった。

次の日、ミユキが学校に登校すると、ノゾミとマキの様子がふだんとちがっている。いつもはいっしょに話をしていて、登校したミユキをむかえてくれるのに、今朝はおたがいに別の友達と話している。ミユキはそれとなくマキに話しかけてみた。

「おはよう、マキちゃん。ノゾミちゃんにブログ見たこと、話してみた。」

すると、マキはおこつて言った。

「ねえ聞いてよ。今日こそ、いっしょに調べものをして、そのあと遊ぼうつてきそつたのに、ノゾミちゃん、今日はほかの子と遊ぶ約束してただつて。グループ研究の発表まで時間ないのに。ほかの子と遊んだりブログしたりするひまがあつたら、手伝ってくれたらいいのに。ひどいよね。」

マキのあまりの言いように、ミユキはただたまつてうなずいた。

放課後、二人はマキの家で調べものの続きを始めた。ふとマキが見ている画面を見ると、ノゾミのブログがうつし出されていた。

「あれ、マキちゃん、まだ、ノゾミちゃんのブログ見てるの。」

「ちよつとコメントを書きこもつと思つてさ。『あんたなんか、知らない』つて。」

パタパタとキーボードをたたくマキを見て、ミユキはあわてて言った。

「ちよつ、ちよつと。そんなこと書いていいの。おこられるよ。」

「名前書かなかつたら、だれが書いたかなんて分からないわよ。だつて、ノゾミちゃんが悪いんじゃない。何。ミユキちゃん、ノゾミちゃんの味方するの。」

「え、ちがつよ。そうじゃなくて。でも……。」

マキがポンとキーをおした。文字がブログに書きこまれる。ミユキは何も言えず、じつと画面を見つめていた。

家に帰ってから、マキの家でのご飯がずつとミユキの頭からはなれなかった。思い出すと、心ぞうがドキドキして、いてもたってもいられなくなる。とつとつ、ミユキは母のところへ行った。

「ねえ、あのさ、お母さん。こんを話聞いたんだけど、どう思う？」

聞き終えた母は、しばらくじつとミユキを見つめ、やさしく言った。

「もう少しだったのにな。」

「え……何のこと言ってるの……お母さん……。」

(お母さん、わたしのことつてすぐ分かったんだ……どうしておじらないの。)

そのとき、ミユキは母の気持ちが無となく伝わってきたような気がした。

「何が正しいのか分かっているのに、できなかつたこと、お母さんにもあつたわ……。」

ほほえみながら母は言った。ミユキは、そんな母の笑顔を見ていると、何だかあたたかい元気みたいものが心の底の方にわいてきたことを感じた。

「ねえ、ノヅミちゃん、まだあやまつてこないね。もうちよつときついでに、書いてやおうか。」

次の日の放課後、いっしょにしていた宿題の手を止めたマキがそう言った。ノヅミのブログのページを開き、マキはパタパタとキーボードをたたき始めた。ミユキの心ぞうがドクンと鳴った。

(こんなのためだ。でも、言つたら……。)

考えただけで手がふるえてきた。

「よし、これでオッケー。」

マキがキーをおそつとしたとき、昨日の母の笑顔が頭の中につかんだ。

(……分かっているのに、できなかつたこと、お母さんにもあつたわ……。)

ミユキはふるえる手でマキの手をつかんで言った。

「だめだよ、マキちゃん。どつちの味方とかじゃなくて、やっぱりだめだよ。」

自分でもおどろくほど大きな声が出た。ものすごいスピードで心ぞうが鳴っている。けれど、その手はもうふるえていなかった。



- 何も言えず、じつと画面を見つめながら、ミユキはどんなふうに考えていたでしょう。
- マキの手をつかんで「やっぱりだめだよ」と言つたとき、ミユキはどんなふうに思つていたでしょう。

## 5 小学校高学年用「分かっているのに」 指導例

情報化社会の進展に伴い、インターネットの掲示板や携帯電話などのメールによる「ネットいじめ」が問題となっている。ネットワーク上のコミュニケーションは、匿名性が高く、誹謗中傷の言葉や表現が掲載されやすい。ネットワーク上と社会生活上のコミュニケーションは、異なる特性があることを理解した上で、相手の立場に立った思いやりのある行動がネットワーク上でも必要である。こうした情報モラルに関する指導に生かすことを念頭に、自律的で責任のある行動をとることの大切さについて考える道徳の時間に活用できるよう、本資料を作成している。

展開では、軽い気持ちでノゾミを中傷する書き込みをするマキをとめられないミュキの心の弱さと、母の励ましでその弱さを克服していくミュキの心の動きを中心に話し合うようにしたい。特に、本指導では、インターネットは便利で自由に使えるものであるからこそ、使う上でのマナーや危険性などについて理解し、他者や自分自身に対する責任を果たすことの大切さに気付かせることをねらいとしており、情報モラルに関する指導の機会とするとともに、自由とそれに伴う責任について考えを深め、道徳的判断力や実践意欲を育みたい。

- ◆ **主題名** 弱さを乗り越えて      **指導内容** 高1－(3)  
**資料名** 分かっているのに      (奈良県教育委員会)

### ◆ ねらい

ノゾミを中傷する書き込みをするマキをとめられないミュキの心の弱さと、母の励ましでその弱さを克服していくミュキの心の動きについて話し合うことを通して、インターネット利用などにおいても、他者や自分自身に対する責任を果たすことの大切さに気付かせ、自律的で責任のある行動をとろうとする意欲を高める。

### ◆ 展開

	学 習 活 動	主な発問と予想される児童の意識	指導上の留意点	備考
導 入	1、ブログについて話し合う。	○ ブログを知っていますか。 ・インターネットで書き込める。 ・お家の人もスマホでやっている。	・自由に知っていることを交流し合い、本時の資料への興味・関心を喚起する。	
展 開	2、資料「分かっているのに」を読んで話し合う。	○ 怒っているマキの言葉を聞いて、黙ってうなずいたミュキは、どんなことを思っていたでしょう。 ・そこまで言わなくてもいいのに。 ・マキが怒る気持ちも分かる。	・マキとミュキの言動から二人の性格を読み取るようにし、気の強いマキに思っていることをはっきり言えないミュキの弱さを押さえ	補助 写真

展		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ どうすればいいかわからない。</li> <li>○ 何も言えず、じっと画面を見つめながら、ミュキはどんなことを考えていたでしょう。</li> <li>・ 書き込みを見たノゾミちゃんは傷付くだろう。</li> <li>・ ノゾミちゃんの味方をするわけではないけど、これは間違っている。</li> <li>・ ちゃんとマキちゃんを止められなかった自分にも責任はある。</li> <li>○ 母の言葉と笑顔から、ミュキは母がどんな思いを自分に伝えようとしていると感じたでしょう。</li> <li>・ 正しいことはあなたはちゃんと分かっている。そのことがうれしい。</li> <li>・ 自分の弱さに悩んでいるのはあなただけじゃない。頑張る。</li> <li>◎ マキの手をつかんで「やっぱりだめだよ」と言ったとき、ミュキはどんなことを思っていたでしょう。</li> <li>・ ちゃんと言えたぞ。</li> <li>・ 後で何と言われようと、ここで伝えないと今までと変わらない。</li> <li>・ お母さんも応援してくれたんだ。言えてよかった。</li> </ul>	<p>る。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 一度ブログに書き込んだコメントは消せないことから、ミュキがこの後どうなっていくかということについて思い悩んでいる気持ちを考えられるようにする。</li> <li>・ 黙っていられずお母さんに相談するミュキの姿から、ミュキのやさしさや正直さを喜び、心の弱さを受け止めて励まそうとする母の思いを想像させるようにする。</li> <li>・ 大きな声が出たことや、手のふるえが止まっていたことから、言えた喜びや満足感に気付かせるようにする。</li> <li>・ ワークシートに記入させ、友達と意見交換することで考えを深められるようにする。</li> </ul>	
開	3、自分を振り返る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ ミュキが果たした責任は、誰に対してのものだと考えますか。</li> <li>・ ノゾミに対する友達としての責任。</li> <li>・ マキに対する友達としての責任。</li> <li>・ 励ましてくれた母に対する責任。</li> <li>・ 自分自身に対する責任。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 誰に対する責任も間違いではなく、自由に考えを交流させるとともに、責任を果たした喜びや満足感があることを押さえ、自律的で責任のある行動をとろうとする意欲を高めるようにする。</li> </ul>	ワークシート
終末	4、指導者の話を聞く。		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自分の迷いや弱さに打ちかった喜び、誇りなどについて指導者の経験等を話し、自律的で責任のある行動をとろうとする心情を温めるようにする。</li> </ul>	

# 道徳ワークシート

名前 ( )

マキの手をつかんで「やっぱりだめだよ」と言  
ったとき、ミユキはどんなことを思っていたでし  
ょう。

-----

-----

-----

-----


-----

-----

-----

-----

-----



小学校高学年用

帰り道で

## 帰り道で

ある日の学校からの帰り道のことだった。ぼくたちは、いつもの五人で帰っていた。「うわっ。」

急にヤスオがさげんだ。見ると、ヤスオはあわててランドセルを下ろしてシャツの後ろを引っ張っている。サトシとトシヒサが後ろでくすくす笑っている。

「何か入ってる！取って。」

かけよって見てみると、葉っぱが背中にべばりついていた。サトシとトシヒサがいたずらしたのだ。シンゴが、笑いながらぼくに言った。

「葉っぱくらいで大げさだよな。なあ、ケンイチ。」

ぼくは、あいまいに笑ってうなずいた。

最近、こんなことがどうも多い。ぼくたち五人の中では、いつもシンゴがリーダーだ。いつ集まるかとか、何して遊ぶかなんかも、シンゴがたいてい言い出して決める。そうして五人で楽しく過ごしている。ところが、その中で決まって「イジられる」のがヤスオだ。からかわれたり、ちよつとしたことで文句を言われてせめられたりする。いたずらで物をかくされることもある。もちろんさがすとすぐ見つかるところにかくしてあるのだが、ヤスオのあわてる様子をみんなで笑いながら見ている。サトシやトシヒサが、シンゴの顔色を見ながらいつもそんないたずらをやっているのだ。

ぼくはといえば、ずっと気になってはいるのだが、言えばシンゴがいやな顔をするかもしれないのでだまっていた。

「なあ、今日の放課後、四人でゲームしよう。」

休み時間にトシヒサが言ってきた。

「いいけど。四人でするの。」

「ヤスオぬきでやろう。ヤスオ、ゲームも下手だし、四人の方が面白いだろ。シンゴもそう言ってるし。ヤスオには言うなよ。」

その日の帰り道、いつもの五人で帰っているとヤスオが言った。

「今日は何して遊ぶ？」

「いや、今日是用事があるから無理。なあ、みんな。」

サトシがみんなの顔を見回しながら言った。

「そう、分かった。」

ヤスオがそう言う声を聞いたとき、とうとうぼくはがまんできなくなった。

「なあ、みんなでゲームしようよ。五人でさ。いいだろ。」

目のはしにシンゴのおどろいた顔がうつった。サトシとトシヒサはシンゴの方をうかがっている。

「別にいいけど……。なあ。」

サトシとトシヒサを見ながらシンゴが言った。ぼくはほつとした。

その日、帰ってから、ぼくたち五人は公園に集まってゲームをした。ぼくは、ゲー



ムをしながらヤスオの顔を見たが、ヤスオが何となく暗い顔をしているのが気になった。

次の日、ぼくはトシヒサに声をかけた。

「なあ、今日も放課後、ゲームする？」

「いや、今日は用事あるから無理。なあ、サトシ。」

サトシを見ながらトシヒサが言った。少し離れたところで、シンゴが笑いながらこっちを見ていた。

その日から、ぼくはみんなと遊ばなくなった。というより、さそわれなくなった。学校でも、その四人と過ごすことはなくなったのだ。帰りも、少し離れて歩くぼくの前で、四人が何だかんだとおしゃべりしたり遊ぶ相談をしたりしている。そう言えば、ヤスオはあまりからかわれなくなったようだ。別れぎわ、一人で歩くぼくを、ヤスオがちらりと悲しそうな目でふり返った。

ぼくが家に着くと、ヤスオから電話がかかってきた。

「ケンイチ君、ごめん。みんなでケンイチ君のこと、無視することになっていて……。

ぼく、ぼく、何が言うと、またいやなことされるし……。ごめん……。」

その日の夜、たまらなくなってきたぼくは、お母さんに話をした。だまって聞いていたお母さんは、にっこりと笑って、そして言った。

「ケンイチ、お母さんはあなたのお母さんでよかったわ。ちゃんとヤスオ君をさそったあなたのね。なかまはずれなんて気にしない。はずされても、はずすよりずっといい。いじめられても、いじめるよりずっといい。何が正しくて何がまちがってるかは、ちゃんとだれかが見てるのよ。おばあちゃんもよく言ってるでしょ。おてんとさまが見てるつてね。」

ぼくは、この数日ずっと重たかった心が、すっと軽くなっていくような気がした。

翌日は、さわやかな青空だった。空の上からだれかが、おてんとさまが、ぼくのことをちゃんと見てくれてるんだと思いながら、ぼくは空を見上げた。目のはしに、ヤスオがこっちに向かって歩いてくる姿が見えた。



- ほつとしたとき、ケンイチはどんなことを思ったでしょう。
- たまらなくなつて母に話をしたケンイチは、どんな思いでいたでしょう。
- ケンイチが、重たかった心が軽くなっていくような気がしたのは、どうしてでしょう。

## 6 小学校高学年用「帰り道で」 指導例

本資料では、いわゆる「いじめ」やそれにつながるものとして、身近な友達との関係の中で起きる相手の気持ちを考えない言動がエスカレートしていく過程を取り上げている。ヤスオに対する周囲の言動の不合理性に気付いたケンイチが、それを正したために今度は自分が排除されるようになってしまう。ケンイチが、悩みながらも、不正を許さず正義を大切にした自分自身へ誇りや、そんな生き方をしていくことの喜びを感じる姿が描かれている。

展開では、ケンイチの思いを軸に、それぞれの登場人物の言動を押さえながら、何がおかしいのか、偏見や不合理がどこにあるのかを考えさせ、それがいじめや差別、またそれらにつながるものであることにも気付くことができるようにしたい。そして、「空の上から見ている誰か」とは何を象徴しているのかについて話し合わせることで、不正を憎み正しいことを貫こうとする勇気やそうした生き方へのあこがれを育みたい。

- ◆ **主題名** 正しいこと      指導内容 高4ー(2)
- 資料名** 帰り道で      (奈良県教育委員会)

### ◆ ねらい

ヤスオに対する周囲の言動の不合理性に気づき、正したために今度は自分が排除されるようになったときや、正しいことを貫いた自分自身に自信がもてるようになったときのケンイチの思いについて話し合うことを通して、誰に対しても公正、公平にし、正義を大切にしようとする態度を育てる。

### ◆ 展開

	学 習 活 動	主な発問と予想される児童の意識	指導上の留意点	備考
導 入	1、「正義」について話し合う。	○ 「正義」とはどんなことだと考えますか。 ・悪いことをしないこと。 ・法律に反しないこと。	・自由に意見を出し合わせ、本時の主題につなげるようにする。	
展 開	2、資料「帰り道で」を読んで話し合う。	○ ケンイチが、ヤスオのことが気になりながらも黙っていたのは、どんな気持ちからでしょうか。 ・こんなことはおかしいけど、自分が言って気まずい雰囲気にしたくない。 ・シンゴの機嫌を損ねると困る。 ・今の関係を壊したくない。  ○ シンゴの言葉を聞いて、ケンイチがほっとしたのはどうしてでしょう。 ・ヤスオを仲間はずれにしなくてすんだから。 ・シンゴを怒らせずにすんだから。	・ヤスオがからかいの対象になっていることの不合理性とともに、シンゴを頂点とした友達関係の中で起こっていることを押さえ、身近な友達関係を見直すきっかけとでもできるようにする。  ・ほっとしたのはなぜか、ヤスオのためか、自分のためか、どちらがより強いかを問い返すなど、主人公の思いを掘り下げて考えられるようにする。	

展 開		<ul style="list-style-type: none"> <li>○ たまらなくなつて母に話をしたケンイチは、どんな思いでいたでしょう。</li> <li>・ 今度はぼくが仲間はずれにされるなんて。どうしたらいいのだろう。</li> <li>・ 何も悪いことはしていないのに。</li> <li>・ ヤスオの気持ちも分かるのでつらい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 心ならずも主人公を排除する側になったヤスオの思いについても触れ、主人公の怒りや、やるせない思いにせまることができるようにする。</li> <li>・ ワークシートに記入させ、友達と意見交換することで考えを深められるようにする。</li> </ul>	ワークシート
	3、「心のノート 小学校5・6年」86、87ページを見て、自分を振り返る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎ ケンイチが、重たかった心が軽くなっていくような気がしたのはどうしてでしょう。</li> <li>・ 正しいことをしている自分を母に認めてもらえたから。</li> <li>・ 黙っている自分より、言えた自分の方がずっといいと思えたから。</li> <li>・ 分かってくれる人や見ていてくれる人がいると思えたから。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 母の笑顔は何に対するものか、「空の上から見ている誰か」とは何を象徴しているのかなどについて話し合い、主人公の不正を許さず正義を大切にした自分自身へ誇りや、そんな生き方をしていくことの喜びを感じる姿に共感できるようにし、不正を憎み正しいことを貫こうとする勇気やそうした生き方へあこがれを育むようにする。</li> </ul>	「心のノート」
終 末	4、指導者の話を聞く。		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 迷いながらも正しいことを貫いた気持ちよさ、そんな自分への肯定感や誇りなどについて指導者の経験等を話し、公正さや正義を大切にしようとする思いを温めるようにする。</li> </ul>	

※「心のノート」は、次のURLよりダウンロードできます。

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/doutoku/detail/1302317.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/doutoku/detail/1302317.htm)

# 道徳ワークシート

名前 ( )

たまらなくなつて母に話をしたケイイチは、どんな思いでいたでしょう。

Handwriting practice area with 10 horizontal dashed lines. On the right side, there is a watercolor illustration of a woman with dark hair and a man with dark hair, both looking towards the left.